二〇一一年十二月　山陰研究　第四号　抜刷
島根大学法文学部　山陰研究センター

浜田藩江戸屋敷女敵討の実録と読本

田中則雄

【論　文】

浜田藩江戸屋敷女敵討の実録と読本

田中則雄
（島根大学法文学部）

摘　要

享保年間に浜田藩江戸屋敷で起こったとされる女敵討事件は、実録・読本において小説化されたが、その際、それぞれの様式に従って翻案が行われている。

キーワード：実録、読本、近世小説

一　浜田藩江戸屋敷女敵討事件とその小説化

享保八年（一七二三）三月二十七日、浜田藩主松平周防守康豊の江戸屋敷の奥において、局沢野が中老滝野を叱責悪言したことから、滝野は自害、滝野の下女山路が沢野を討って主の仇を報じたとのことが、本島知辰の『月堂見聞集』巻十五、大田南畝の『一話一言』巻五十五に記されている。この敵討についての考証は近年、岩町功「鏡山事件の不思議（上）（下）」[1]においてなされている。岩町論文にも指摘される通り、この事件に関しては藩の記録など直接的史料が伝存しない。その一方で、これを素材とする実録に記される事柄があたかも史実のごとく扱われるということも起こっている。『一話一言』で別の箇所（巻五十一）に掲げる一節では、中老の名がみち、下女の名がさつとなっている点をはじめ、事件の経緯についての記述も実録に見えるところと重なる。

この敵討はまず実録によって世の人の知るところとなり、やがて浄瑠璃として舞台化され、読本として刊行されるに至ったが、それぞれのジャンルによる様式の違い、作者の関心の置き所の違いによって、事件の捉え方に差異が生じている。本稿はこの問題を、近世中期から後期にかけての小説―実録と読本―に絞って考察しようとするものである。

二　当敵討実録の概要

この敵討を素材とする実録の伝本は数多いが、本文の形態により大きく二系統に分類できる。いま仮にそれぞれA系統、B系統と称する。

A系統　「享保九甲辰年石見国浜田の城主六万四百石松平周防守源康豊と申て、賢才正しき君あり」で始まる本文を持つ。

『松田女敵討実録』（山本修巳氏蔵、国文研マイクロ）、『女敵討』（長野県短期大学蔵、国文研マイクロ）、『三巴女敵討』（蓬左文庫蔵、国文研マイクロ）、『石見忠女』（東大蔵）など

B系統　「夫忠孝貞信は男女のへだて無、人情に通じて珍らしからず」で始まる本文を持つ。また序を備えるものもある。

『女敵討実録』（京大穎原文庫蔵、国文研マイクロ）、『鏡山実録忠臣女敵討』（弘前市立図書館蔵、国文研マイクロ）、『敵討女豫譲』（弘前市立図書館蔵W九一三・五六―一二六、国文研マイクロ）、『敵討女豫譲』（弘前市立図書館蔵W九一三・五六―一二七、国文研マイクロ）、『鏡山実録』（ノートルダム清心女子大学蔵、国文研マイクロ）、『敵討槿花の露』（郷土資料館まにわ文庫（馬庭將光氏）蔵）、『松田系図』（稿者架蔵）、『女敵討周防染』（稿者架蔵）など

両系統の間で、文章表現は異なる部分が多いが、以下のような話の筋は共通する。

①享保九年（実録では九年とする）のある夕暮れ、浜田藩江戸屋敷の奥において、初時鳥を聞いた奥方が侍女みちに詠歌と弾琴を望み急に召した。みちは出ようとするが、上草履が見当たらず、慌てるあまりその場にあったものを履いて御前へ向かった。

②ところがその上草履は局沢野のものであったため、沢野は激怒し、みちを手ひどく罵った上、詫びるみちに向かってその上草履を蹴り付けた。

③部屋に帰ったみちに対して、下女さつは酒肴を用意して元気づけようと努める。みちは帯や小袖などを取り出し、さつに対し、命ははかないものゆえ今のうちにこれらを与えておきたいと言う。さつが寝入った後、みちは親里への遺書を認める。

④翌朝みちはさつに、文箱と文庫を親里へ届けるよう言い付ける。文箱には遺書が、文庫には形見の品々が入っていた。さつが出た後、みちは守り刀で自害を遂げる。

⑤さつは道中で胸騒ぎがして先へ進めなくなり、慌てて引き返すが、みちは既に絶命していた。さつは激しく嘆くが、やがて気を落ち着け、みちの自害は前夜の沢野との一件によるものと断定し、沢野の部屋へ向かう。

⑥さつは沢野に対して、みちが急病で倒れたので見に来てほしいと言って連れ来たり、みちの守り刀で刺し殺す。

⑦駆け付けた奥家老堀野次郎太夫らに対して、さつは経緯を供述する。事件の原因が沢野のみちに対する折檻にあったことが明白となる。

⑧さつは、藩主松平康豊からその器量を認められ、中老として召される。みちの父岡本佐五右衛門の強い希望により、さつは岡本家の養子となった上で出仕し、松岡と名乗る。同藩の土神尾氏と結婚し、一族繁栄する。

いずれの写本もこのような筋を基本としているものの、A系統、B系統それぞれの本の中には、特定の箇所に句や文を増補するなどして、話の中のある要素を強調しようとする営みの見られるものが存する。いわゆる実録の〝成長〟現象である。いま該当する実録の悉皆調査には及んでいないため、その全容を提示することを得ない。以下掲げるのは、浜田藩女敵討の話が、その原型から、実録の継承者（読み継ぎ書き継いだ人々）の手により実録の様式に沿って成長しつつ享受されたということを確認するための具体例である。

三　実録における描写の増補（一）

この実録を継承した人々が関心を置いた点の第一は、前夜の草履事件からみち自害に至るまでの間、さつがみちにどのような思いを向けていたかということである。

まずA系統の『松田女敵討実録』（山本修巳氏蔵）について見る。この本では、前掲梗概の③の部分において、みちは沢野から草履による辱めを受けて帰った直後、このことをさつに知られまいとしていたと記す。

やう〳〵と気を取直し、「若此事をさつが聞付てはさまたげ」と心をきわめ、部屋へ立帰り、何事もおし包み、さあらぬていにてもてなせば、あまりむねんと見へにける。

このあとみちが、自分の命のあるうちになどと言いながら帯や小袖などを与えようとした時、さつは、ご両親のある身でそのような疎ましいことをおっしゃりますなとたしなめてはいるが、自害するとまでは案じていない。その後④の部分でも、さつは特に危惧する様子もなくみちの親里への使いに出発したとし、⑤の部分で、道中急に胸騒ぎが起こり、ここで前夜の草履事件のことと関連付けてみちの安否を危惧するに至ったとする。この後大慌てで引き返すが、みちは既に自害を遂げていた。

ここまでの経緯については、敵討を遂げた後の取り調べにおける口書の中で、さつの言葉を通じて改めて述べられている。それによれば、直接描写されてはいなかったが、前夜の段階でみちはさつに草履事件のことを話していたということになっている。

夕べくれにお道事御前よりことゞ〳〵しき体にて下り申候間、心得がたく存候て、いかゞの事に候やと承り候へば、替る事もなきよし申候ゆへ、酒をすゝめさまゞ〳〵物がたり仕候内に、沢野様に草履をはね付られ恥辱をあたへられ無念成る事ぞと、一向しよく事もすゝみ申さず候に付、私かれ是と申てさまゞ〳〵致してふせらせ申候。其節何となく帯小袖など私へ呉れ申候。其外に夜中さして替（かはり）候事覚不申候。今朝私に使に参候様申付候間、咄の次第、自害致候程の義にも心付申さず使に出申候。然る処途中にて胸さわぎしきりなれば、心元なく相成り候故、其時夕べお道が物語りの様子を思ひ出し候ゆへ、わけて心元なく、罷り返り候まゝ、……

要するに彼女は、みちの鬱々とした様子に気付いていたし草履事件のことも知ってはいたが、そこから自害という事態に至るとは全く予想していなかったというのである。

この点については他のA系統の本でも、同様の扱いがなされている。中で『女敵討』（長野県短期大学蔵）では、草履事件が起こったのは「卯月の初」、みちが自害したのは「卯月中ば」のことであったとし、二つの出来事の間に時間の幅を設ける。そしてこの間みちは食事も進まず

顔色悪しく過ごしていたが、まさか自害するとは、さつには思えなかったとしている。ここでもやはり、突然の胸騒ぎ、悪い予感、その的中という、さつの心の急転回があったとする解釈が採られている。

B系統の本ではこれをどのように扱っているであろうか。この点に関して、『鏡山実録忠臣女敵討』（弘前市立図書館蔵）は特徴的な傾向を持っているので後掲することとし、先にそれ以外のB系統本の描きようについて、『松田系図』（稿者架蔵）を代表として掲げながら整理しておく。梗概の③、みちが沢野に辱めを受けて部屋に帰ってくる場面、さつはこの段階でみちの鬱々とした様子に危惧の念を抱き、努めて彼女の心に寄り添い、その原因を聞き出し慰めようとしている。

おみちうと〳〵敷体にて部屋へ帰りしかば、さつは心もとなく、「いかゞ被成しや。御前の首尾ばしあしくや。又御気分にてもあしく候や」と念頃に尋ければ、おみちうれしく、「いやとよ、御前の首尾もよく、けふは初時鳥おとづれしまゝ、わが身召御歌遊ばし御琴などあり、今ほど御いとまを下されし也。気ぶんもあしからず。少しおもふ子細あり。必々按じてたもるな」とて、しほ〳〵としていけるゆへ、さつは兎角合点ゆかず申けるは、「御かくし被成候てはなを〳〵あんじられ候。何事にても御かくしなく御咄し下されかし」といはれて、おみちはなみだぐみ、……（草履事件のことを）涙まじりに物語しける。「左様なる事にては御腹立御もつともで御座ります。あのお局様の御心あしきは誰とても知らぬ者もなければ、其様な御気のよはひ事仰られずと、御酒壱つ御あがり被成ませ」と、

梗概④、翌朝みちがさつを起こし、密かに夜中に認めた親里への手紙を託す場面では、さつの心の中に引き続き憂慮があったことを示す記述が入っている。

（みちは）夫より口をすゝぎ手水して法華経一巻よみおはり、「たすけ給へ」とくりかへし、仏を拝し燈明うちけし、あひのふすまをおとづれて、「さつ、おきやれ」といふ声に、ふつと目をさまし、「はや夜が明ましたか。いまねたよふにおもふに、みじかき夜にて御坐ります」といふて、どうやら気にかゝり、虫がしらせていふことか、「夏の夜はまだ宵ながらと詠ぜしも、昔よりしてねたらぬ女子もあつたそふな」とおどけまじりにて、……（さつは、みちから親里への使いを命ぜられて）髪ゆひ仕舞、着物きかへて、「左よふなら参ります」と出ければ、

なお『敵討女豫譲』（弘前市立図書館蔵W九一三・五六―一二六）では、右の引用の末尾に相当する部分で、さつの心の中に次のような動きがあったとしている。

さつは手ばしかく髪を仕舞着物きがへ、「左様ならば参りませう」。併きのふの事も有なれば、何とやらん心に懸り、お道が顔を打詠め居たりしが、至て替りし事もなければ、文箱文庫携へ立出る。

いずれにしてもさつは、懸念しつつも、これならまずは大事なかろうとの思いの中で出発したという扱いである。

一方同じB系統でも、『鏡山実録忠臣女敵討』（弘前市立図書館蔵）は際立った傾向を持つ。さつのみつ（この本では、みちの名がみつとなっている）に寄り添う思いが強く表され、最後も危惧の念を抱きながら使いに出たと書かれている。次の引用の傍線部はそれぞれ前掲『松田系図』における傍線部と対応するが、ここでは二重傍線部の表現が入って来て、草履事件のことを聞いたさつが、この時点で無念と憤りを共有したということが明示されている。

おみつが今日の顔付合点ゆかずと、さつは殊の外案事、おみつに向ひ言けるは、「常ならぬ御顔もち、如何被成しや。御前の御首尾にても候や」と尋ければ、おみつは嬉しげに、「いやとよ御前の首尾もよし。今日は初時鳥の音づれしまゝに我身を召して御歌の御遊の上にて、御琴有しが、今程御暇有しなり。気分悪し。少しおもふ子細有。必案事てたもるな」と言共、さつは合点せず、「案事るなと仰候程、御隠有ては尚々あんじらるゝなり。たとへいささか成る事にても、御家来の私え御隠し被成候事有間敷義なり。何事にても御咄被成て被下」としほ〳〵と申せば、おみつは涙をはら〳〵と流し、……（草履事件のことを）涙と共に物語すれば、さつは無念と歯がみをして聞ゐたりしが、先主人の心を慰んとて、さあらぬ体にて言様は、「そうした事なら御腹立は御尤。さりながらあの御局の事、御心のよからぬは誰も知ておりまする。其様に御気に御懸なされずとも、さらりと打捨、先御酒壱つあがりませ」と、

この後就寝しようと言う場面でも、さつの憂慮は続いたとする。

さつはどこやらおみつが名残を惜むやうな言葉つき故、いろ〳〵言慰て、はやし夏の夜の更行ければ、「サア早々御休み遊ばせ」。「さつ、そなたは明日の勤が大事ぞや」と、おみつ立て寐所を仕舞わさせ、「おさつ大儀じゃ。いつよりも（酒を）過しましたぞ。又明日逢ませふ」と寐屋へうつれば、さつは手をつかへ、「御機嫌よふ御休み給へ」と、一間の襖引立ても、何とやらおみつが事の気にかゝり案事居りしが、

翌朝もさつは自分から目を覚まし（他の本では、みちに起こされる）、憂慮を続ける。使いを言い付けられても躊躇し、叱せられてやむなく出発する。

夫よりうがひ手水して普門品をよみ終、「不老の罪をゆるし給へ」と言声に、さつは驚きふと目をさまし、「覚へず知らず寐入ました。もはや夜が明ましたか。扨々短き夜なり。夏の夜は又宵（ママ）ながら明ぬるをとよんだ人もねむたそふな」とおどけまじりにさつは起、先おみつ様が身の無事を悦び、顔を洗ひいつもの如く朝飯を仕舞、髪を結ひ居所え、おみつは文箱と文庫とを持出、……（これを親元へ届けるようにと言い付ける。）さつは何とやらおみつが事の気にかゝれど、主人の用黙止難く、手ばしこく髪を仕舞て着もの着がへ、「左様なら参りませふ」と言ながらも、昨日の事など思ひ出され、何とやらん心にかゝり、おみつが顔を打詠め、しばしためらひ居たりしが、おみつ声をはげまし、「ヤレさつ、主人のいひつける急用を、何に延引いたしおるや。早急ぎ参れ」としかり付られ、おさつは跡に心の残れ共、只一飛にかけつけ参らんと思ひ、……

以上の経緯について、さつは後の供述の中で次のように述べている。

（沢野に恥辱を与えられたことを）みつ義殊の外無念にぞんじ、部屋え帰りても顔色あしく候故、私様子相尋候得ば、右の次第を、さぞ無念顔にあらわれし故、私も気の毒と思ひ案事られて、無理に酒を進め気をいさめし処、いつになき暇乞の体の事共申、其上にて小袖帯抔私へ呉れ、夫より休まれし故、私も何とやら気に懸り候得共、いつよりも少し酒を過し候へば、何のよねんもなく寐入候て、其跡はぞんじ不申候。今朝はみつ義いつもより早く起、私に親里へ使にまいるよふに申付候故、跡に心はのこれ共、主人の用黙止難く、……

この本では、さつはみち（みつ）の心に終始寄り添い続けていたが終に彼女の死を止めることはできなかったと解するのである。

四　実録における描写の増補（二）

さつが沢野を討つ場面について、『松田女敵討実録』（山本修巳氏蔵）には特徴的な描写が存する。先に、同じA系統から『女敵討』（長野県短期大学蔵）の該当箇所を例示する。ここでは次のように、さつは沢野を取り押さえて罵倒し、そのまま討っている。

（さつは）「……あれ見おれ。大切の御主人お道様え能も上草履をけつけたな。さむらひの子が一分立ずと人まじわりがならぬとて、あのやうに死なしやつた。其眼で能見て置。若き人を口先で殺し能も〳〵ぬかぬかと何くわん顔で居よふとは、余り〳〵ふとひねぢかねば、。下女でこそあれ、心は己におとろうか。死で恨が言度は、毎日成と来てぬかせ」と、無二無三にとつて伏、*お道が死がひに打重ね、すかさず上へ乗掛り、お道が咽へつき立し血まぶれに成し九寸五分、沢野が咽へ押当て、「思ひしつたか、面悪ぐや」と其儘ぐさとさしつらぬく。

これが『松田女敵討実録』では、右の引用の＊に当たる箇所に、沢野が抵抗し両者激しく渡り合い、さつが一旦窮地に陥る様が加わっている（次の引用の〔　〕で括った部分がそれに該当する）。

……無二無さんに取て伏せんとする所を、〔名におふ強気の局なれば、さつを其まゝつき飛す。又おき上り飛かゝるを引はづして取ておさへ、「扨々下主女郎の分として此沢野に手向ひとは不届千万なる女郎かな。見ればお道は自害して居る様子也。定て何んぞ死なねばならぬ訳が有りて、それでくたばつた物であらふ。但しはおのれが殺しおつたかなどゝ、まさしくよく偽言をつきおつた。此口でぬかしたか。いや此つらでほざいたか」と、おし伏せ〳〵畳にすり付け、さん〴〵に打擲し、さつが髪の毛手にくる〳〵とまき付て、ざしきの内を引ずり廻せば、ふりはなさんとあせれども、ちからおよばず、せん方なく涙ごへして、「ゑゝ残念や。どふよくなる悪人め。殺さば殺せ。くひ付てなりとも此恨はらさいで置ふか」と身をもみもがけども、詮方なくぞ見へし所に、さつが運や強かりけん、局に引づられながらお道が死骸の側へよりしを、さつは爰ぞと嬉しくおもひ、お道が咽へ突込し血に染たる相口を、手をさしのばしとるよりも早く局のふともゝへ力にまかせ下より突とふせば、さすがの局もうんとそのまゝ仰天して倒るゝ所を、すかさずさつはおき直り、巻き付けられし髪をふりはなし、相口を取直し〕局をお道が死骸に打付け、上に乗りかゝり、局の咽喉へ相口おし当て、「おもひ知つたか、つらにくや」と、其まゝぐつとさしとふせば、

続いて次のような沢野最期の様も加えて、その手ごわさを強調する。

（沢野は）わつとばかりに七転八倒、手足をもがきくるしみ、眼をむき出しにらみ付たるその顔色、身の毛もよだつごとく也。されどもさつは敵を討とり一心にて、少しも恐れずおしすくめ、こぶしも通ふれとつゞけざま三刀四刀突つらぬく。

さつは作中〝勇〟を以て称揚されているが、その実態の部分を描き出したいとの意識が働いたものと窺える。

そもそもこの事件において、さつはみちの死後即刻沢野を討っているため、一般的に敵討ものにおいて一番の読ませ所となる、敵討成就

までの艱難辛苦の過程（零落、犠牲などありながら乗り越えて行く様）の描きようがない。そこで一には、みちの心に注ぐさつの思いに、また一には、手ごわき沢野を凌駕するさつの勇に注目するなどのことが起こったものと思われる。前述した通り当該実録の悉皆的調査には及んでいないため、ここでは、浜田藩女敵討の話が、筋の大枠は決まったものでありながら、各々の本の継承者の意識に沿って特定の要素が強調されながら享受されて行ったことを確認するにとどまる。

五　読本『女敵討記念文箱』

天明二年（一七八二）三月に中本型読本『女敵討記念文箱』が刊行される。同年正月に容楊黛作の浄瑠璃『加々見山旧錦絵』が江戸外記座で初演されていることとの関連も想定され、この読本の作者が容楊黛である可能性も考えられるが、依拠しているのは実録の方である。[2] ただし全体としては実録に拠りながら（主としてA系統の本を用いたと推測される）、以下掲げるように、読本化するために幾つかの変更を加えている。

建久四年五月、源頼朝の御所奥でのこと、時鳥を聞いた政子御前から道芝（畠山重忠の娘）が弾琴を所望され急に召される。駆け付けた道芝を大老ゑびら（梶原景時の妻）が、遅いと言って罵る。このあと道芝に梶原源太からの艶書が届けられ、道芝はこれを穢らわしと憤りつつ人に見られじと一旦懐中する。この様子を窺っていたゑびらが、妻ある源太との不義見届けたと言い立て、草履で激しく打擲する。理不尽な仕打ちに道芝が怒りの色を見せると、大老たる自分に手向かいはなるまいと言い、「ひつきやうみづからがやうなるほとけしやうなるもの故に、けふのしだらはたすけてやる。いのちのおやじやと思はれよ」と言い捨てて去る。ここから道芝の自害、下女なつによる仇討へと展開する。

実録では、沢野とみちとの間に個人的な遺恨は何もなかったという扱いになっていた。沢野は元来「としの寄るにしたがひいつとなく気みじかに怺しやうな」き者であったところに、みちによる草履の間違いがあって激昂して止まず、この事態に及んだとし（『松田女敵討実録』）、特にB系統の本では念入りにも、さつの供述の中で「全体お局様おみち常々意趣異恨も無御坐候様に奉存候」と述べさせている（『松田系図』）。

一方読本『女敵討記念文箱』では、ゑびらについて「気みじかく、あまたの女中にむりをいひしかりちらす」と短気のことは書かれているが、のみならず「多くの女中の上にたち、大らうしよくをはなにかけ、政子御前の耳ねぶり」、「邪智ふかくして、道芝が政子御前の御気に入をねた」む者であったと、邪なる人間という規定が明確になされる。かくてこの事件はゑびらが故意に仕掛けて起こったものであったとする。実際道芝はゑびらに対して何も粗相をしていない。まず御前への参上が遅いと決め付けられ、さらには不義の濡れ衣を着せられ無体に打たれている。この事件は「ゑびらが邪智よりことおこり、道芝にあく名付け草履を以て打擲と云ひ、かた〴〵以て大老に似合ざるいたしかた」によるものであったとされ、政子御前から「ゑびらがねたみにより道芝にむじつのとがをお、せ草履をもつて打たれしを、（道芝）女ながらも武士道を立てのじがい、あつはれ重忠が娘也。……（なつも）下々にはまれなる忠義の女、主人の仇をたち所に打たるはたらき」感ずべしとの仰せがあったとする。実録から読本に仕立てるにあたり、悪が増長して善を抑圧するが、終に善が悪を討つことで収束するとい

う構造を設けようとする意識が働いたことが見て取れる。

六　読本『絵本加々見山列女功』

浜田藩女敵討の話は、さらに読本『絵本加々見山列女功』（川関惟充作、享和三年（一八〇三）刊。以下『列女功』と記す）へと取り入れられる。横山邦治『読本の研究』[3]で指摘され、藤沢毅「『絵本加々見山列女功』論」[4]で詳細に検討される通り、本作は浄瑠璃『加々見山旧錦絵』（前掲。以下『旧錦絵』と記す）に大きく依拠している。浄瑠璃『旧錦絵』は、浜田藩女敵討の話に、加賀藩の御家騒動（実録『見語大鵬撰』等によって伝わる、大槻伝蔵による藩主謀殺など一連の事件）を接合し、全体を足利持氏の鎌倉公方家での話としているが、読本『列女功』もこの点を踏襲する。ただし浄瑠璃では、仁木将監等の悪人一団は同じく悪人である大杉源蔵（実録の大槻伝蔵に基づく）の腹の内を終始量りかねているとされていたのを、本作では、大杉源蔵を善の側に位置づけ、悪の側は山名宗全等の一団のみに一本化することで、ある種の合理化を行っている。また浄瑠璃では途中で謀殺される足利持氏が、本作では生き延びるとされている点、畑助なる人物の扱いの違いも藤沢論文の指摘の通りであるが、ここではこれらのことを読本の構造に関わる問題として捉え、私見を述べたい。

以下、本作『列女功』における御家騒動と女敵討との接合の仕方を、浄瑠璃『旧錦絵』におけるそれと比較しつつ検討する。『旧錦絵』の尾上は、悪人一団の密書を拾ってしまったことから、これに一味する岩藤から憎まれ、同僚たちの前で町人の娘と罵られ（浄瑠璃では、商家の出という設定）、草履で叩かれて傷心し自害する。一方読本『列女功』では、尾上を悪人一団の営みと終始対決する忠女と位置付けた。尾上は、岩藤が山名宗全に宛てた密書を拾う。その後、岩藤から町人の娘と貶められるが、彼女は、なるほど私は町人の娘、しかし「得て身分不相応の望をすれば、御出頭でも油断はならず。結句町人の娘がまし。数代の御恩を請たといふて忠臣の有るではなし。どこぞのすみでは悪工（わるだくみ）。油断のならぬ世の中」と切り返し、岩藤は「胸にぎつくり」となる。また岩藤が足利家の宝蔵に盗みに入ったのを尾上が見付けた時、山名宗全が礫を打って尾上の手燭を消した。後日この悪人一団と忠臣細川刑部とが口論した時、尾上は引き分けて入り、「此尾上も物毎を潔白に致し、見聞（みきく）ましたる事を真直に此席で申ましよ」と言い、宗全は慌てて俄追従して退く。さらに宗全・岩藤が侍女早枝に宝蔵の盗賊の罪を着せようとするのを彼女は止め、「イヤ申岩藤様。尾上が脇より申さふならば申分がござります。過し夜御宝蔵へ忍び入し曲者こそ纏紛（まごふ）方なく六十近き婦人、物ごし恰好取廻し似たるといふも瓜をふたつ。又砕（つぶて）を投し其人も面（おもて）を包（つゝみ）し薙髪の老人」と指摘する。宗全・岩藤は底気味悪く、このまま捨て置かれじと、尾上を立腹させて粗相をさせ身を退くべく仕向けようと、攻撃に出る。かくて、奥方から尾上が急遽召されるような状況を故意に作り、その時岩藤の草履を履くよう仕向けておいて、罵り踏みつける（この草履間違いは実録からの摂取であるが、さらに悪質なものとしている）。さらに鶴岡八幡宮において、町人の娘と罵りつつ満座の前で足下に懸ける。

尾上が自害を決意する様の描き方にも改変が見られる。彼女が親里への手紙をお初に託して出発させた直後の場面を比較してみる。

浄瑠璃『旧錦絵』[5]

影見ゆる迄見送りて、こらへ〳〵し胸の中、思はずわつと伏沈み、

きへ入る計り嘆きしが、やう〳〵に顔を上、「まだ昨日今日馴染もない此わしを大切に、大恩受けた主人じやと、年はも行ぬ心から大事に思ふてくれる心。コリヤ忝いぞよ、嬉しいぞよ。岩藤へ意恨を察し、さつきにも余所事に浄瑠璃の譬を引き、わしが短気な気も出よかと、云廻したる健気な利発。今別れたが一生の別れとは知らずして、嘸やとつかは戻つて来て、嘆かん事の不便や」と、身も浮計せき上げて、前後不覚に嘆しが、やゝ有つて顔を上げ、〔「と、様やかゝ様の此年月の御不便がり、御恩は海も猶浅く、山より高き御恵み。片時忘れぬお二人様。此中のお文にも、かゝ様の細々と、……と小さい子供か何ぞの様に、成人の此わしを大事がつてござる其中へ、アノ文を御らふじたら、何と身も世もあらりやうぞ。常に気細なかゝ様の其場で直ぐに死なしやんしよ。今死る此身より跡の嘆きを見る様で、胸もはりさく悲しさは、何の因果の報にて、親子の縁の薄墨に書き置く筆の逆様事。必お赦し遊ばせ」と〕正体涙せぐり上、身も浮計り取乱す。「ア、我ながら未練なり。女ながらも武家奉公。草履を以て面を打たれ、何面目に存へて人に顔が合はされうとは思へ共、大切な御前様への忠義を思ひ、今迄はながらへしが、此書置に委細の訳。伯父大膳の悪事の密書。命を捨て上への忠臣。只何事も宿世の約束。最期のはれの支度して一遍のきやうだらに唱ん物」と……

読本『列女功』

影見ゆる迄見送つて、「深馴染も無私を大恩請た主人じやと大事に思ふ心差、忝ぞよ、嬉しいぞや。岩藤への意恨を察し、余所ながら心を付る健気の程、忘れ置じ。左りながら今別たが顔の見納とは知らずして、嘸や跡にて不便の泣。(1) 取分勿体なきは花の方様。二人が中を御存有り、事をわけたる御意の程。有難とは思へ共、一度ならず二度三度満座の中にて恥辱をかき、町人の娘でも武家に奉公するからは、主君へ対し何面目に存らへて親の名迄を汚さんと思へど、(2) 御家の一大事、御台様への忠義を思ひ今迄はながらへしが、(3) 宗全が詞の端、岩藤が邪智佞奸、活て付そひ居る時は返て御家の騒動止ず。アノ書置には委細の様子。宗全が悪事の密書。命を捨て上への忠節。唯何事も宿世の約束。イサ心よく最期のはれの支度して一遍の念仏せん」と……

まず浄瑠璃では、点線部に見られるように尾上の悲愁の様を重ねて描写するが、読本では全て削除されている。〔　〕で括った両親を思っての嘆きも、浄瑠璃のみに見られる。一方、二重傍線部は読本のみに存するもので、いずれも御家を思う言葉である。そのうち（1）は、今の場面に先立って付加された話―奥方花の方が岩藤との軋轢を知り、尾上に堪忍が大事と教訓したこと―を指す。（2）は今起こっている御家の危機のこと。（3）は、このまま生きながらえるより、死を以て御家の騒動を解決に導くという決意をいうものである。

浄瑠璃の引用の最後の部分「ア、我ながら未練なり」以下の言葉は、〈恥辱を受け死にたいと思ったのを奥方への忠義を思い辛抱していたが、最早限界。ただしこの書き置きと謀叛人大膳の密書を差し出すことで忠臣としての役割は果たせる〉の意。一方読本においては、尾上の意識の中心はあくまでも御家の事にある。悪人一団を牽制し、陰謀の阻止に腐心し続けてきた彼女は、終に命を賭してこれを全うしたとするのである。

波線部の表現が、読本において簡略化されていることについて触れる。浄瑠璃『旧錦絵』の波線部は、この前の場面で、草履打ち事件の

ことを他から聞き知ったお初が、尾上の沈んだ様子を見て心を痛め、『仮名手本忠臣蔵』の塩冶判官の振る舞いをどう思うかと問うたことをいう。尾上が、塩冶が高師直の仕打ちに憤り抜刀したのはやむを得ぬと答えると、お初は、しかしそれによって千万の家臣一族が路頭に迷うこととなったのであり、短慮は慎むべしと戒める。お初の真意については、この後の場面、彼女が尾上の死を知って愁嘆する中で明かされる―当然岩藤は許すべきものではない、塩冶の振る舞いを肯定なさったのは、そういう心の張りがあることの証しであり、安堵した。がしかし本当に塩冶と同じことをなさっては大変だとの思いから諫め申したのだ―。そして、この上は自分が必ず敵を討つと決意する。

意恨の草履手に取上て、打詠め〳〵、無念の涙血をそゝぎ、こりかたまりし烈女の一念。義女の其名を末の世に錦と替る麻の衣、女鑑としられけり。

これは正に大星由良之助が、塩冶判官切腹の九寸五分をうち詠め、主君の無念を受けとめる場面と重なる。かくてお初は「恨みの草履片手には血汐した、る尾上が懐剣」携えて岩藤の所へと向かう。尾上が叩かれた後あえてもらい受けて帰った草履は彼女の無念の象徴であり、お初はその無念を我が心底に焼き付けたのである。

尾上の遺した書き置きによって、奥方花の方は悪人一団の謀計のことを知る。お初はここで剃髪を望むが、奥方から、「其方が忠心も仇を討しといふ計で、主人尾上が志を立てやらずば、全き忠とは云れまいぞよ」と戒められ、二代尾上として仕え、奥方の上使を務めるなど御家騒動の解決に加わって行く。これは、お初自身も「重きお主の尾上様の御忠節を無にせじ」と受けとめたように、御家を案じながら死んでいった尾上の志を引き継ぐことを意味した。以上のように浄瑠璃では、お初の心はあくまでも尾上に向けられていたのであった。

一方読本『列女功』では、『仮名手本忠臣蔵』をめぐっての遣り取り自体が無い。これに連動して、お初の嘆きと敵討の決意についての場面は次のようにあるのみで、遺恨の草履云々には全く触れるところが無い。

恨つ泣つかきくどき、暫涙にくれけるが、思ひ直して立上り、「此上はいか程に泣とて返らぬ事なれば、岩藤を一太刀恨、密書を差上、御無念の汚名を雪が御為」と、死骸をかへし、奥御殿忍び入こそ健気なる。

この後お初は尾上の書き置きを花の方に奉り、それを読んだ花の方は言う。

誠尾上が自殺は無下ならず。家の為に大の忠義。そなたの岩藤討ちやつたも主の讐なり、家の為。二人共に揃たる列女の鏡の忠臣義臣。

尾上の自害も、お初による岩藤殺害も、御家を守る忠義であったとされる。かくて「岩藤討てより、尾上が召使初、主君の書置を花の方へ差上しによつて謀反人の根元顕て」、事態一気に解決へ向かう様が描かれて行く。尾上・お初の話は、常に御家との関係を保ちながら進行する。

読本『列女功』の全体を統括する枠組は鎌倉公方足利家の御家騒動であり、お初の敵討の話はその中に取り込まれていると、まずは言うことができる。ただしそれをどう取り込むかという点に関して、作者は一定の配慮を備えていた。そのことはお初の父伊場十内の扱いにおいて知られる。本作においては〝十内零落復帰譚〟とでも言うべき話が組み立てられている。まず巻頭に、足利持氏主従が六浦金沢で鹿狩

を行った話を置く。この時土橋が切られたり藪陰から鎗を持つ曲者が現れたりしたことから、狩場を預かっていた十内は責任を問われて放逐される。これにより彼は零落し、その中で病に罹り畑助なる者に借財して本復するが、ある日路傍で畑助から、直ちに返済せよ、ならぬならお初を渡せと迫られる。通りかかった商人坂間伝兵衛が金子を取り出しその場で借金を済ませてやる。この伝兵衛は尾上の父であった。このことからお初は尾上の所へ出仕することとなり、後に尾上の敵岩藤を討つ（前述の通り、この岩藤滅亡から御家騒動は一気に解決へと向かう）。畑助は悪人一団と通じており、岩藤が足利家の宝蔵から盗んだ宝物を預かっていたが、見つけ出されて討たれる。その最期に改悛し、かつての狩場での事件は悪人等と一味をなした自分の仕業であったことを明かす。持氏は十内を召し出し、彼に落ち度はなかったことを認めて帰参を命ずる。同時に娘お初が二代尾上となって出世することで大団円となる。――このように本作は、十内放逐の話に始まり、十内帰参の話に終わる。お初の出仕―敵討―出世の事は、この〝十内零落復帰譚〟に包摂されながら、全体構造たる御家騒動の枠組の中に定着する。なおこの観点から、零落していた十内に借財の返済を強いる人物を、浄瑠璃『旧錦絵』で鷲の善六としていたのを、本作で畑助に変更した意味も把握できる。即ち、十内は畑助の仕業によって零落させられ、畑助によって責められ、畑助の改悛によって帰参を得るのである。かくて畑助も全体の構造に関与する。また足利持氏も、十内を放逐し十内を帰参させ、かつ最後御家に返り咲く。そのため浄瑠璃『旧錦絵』のごとく途中で暗殺されることなく、生き延びるのである。

浄瑠璃『旧錦絵』は、岩藤が、尾上に危害を与えると同時に謀叛を企てる悪人一団にも属していたとすることで、御家騒動の話と女敵討の話とを綯い交ぜにした。川関惟充はこれを、小説としての構造という観点から捉え直した。そこには素朴な形ながら読本の様式への意識が働いていると認めてよいと考える。

七　読本『絵本雪鏡談』

速水春暁斎作の読本『絵本雪鏡談』（文化二年（一八〇五）刊）は、加賀騒動と浜田藩女敵討とを峻別して扱うべしとの立場を表明している。即ち全十二巻のうち巻十一までを加賀騒動に宛てて本編とし、巻十二に女敵討の話を別立てで付帯する。

斯に世俗草履撃と称て鏡山一乱に附会する一奇話あり。もと別事なりといへども誤り伝ふるの久しきを以て、児女の輩あるひは本編に漏脱とせん事を恐る。因て其本末を輯め綴て斯に附す。

これは一巻分のみの短編であり、ここに長編としての構造を求めることは当たらないが、以下掲げるような読本特有の作法が認められる。

人物の名が岩藤、尾上、お初とされること[6]、岩藤は草履で尾上の面上を叩くこと[7]など、一部浄瑠璃から取り入れた要素もあるが、全体としては実録の筋に大きく拠っている。冒頭、「石州浜名の城主誉田近江守某卿、同国の邦君瓶井侯の息女を聘て鎌倉の居館に迎給ふ」と、地名人名等を僅かに言い換えて知る者にはそれとわからせる春暁斎独特の書き方を用いて、足利家ではなく、石州浜田藩、同国（津和野の）亀井家から迎えられた奥方の所で起こった事件であるとして、実録に立ち戻る。ただし以下掲げるように、実録に対して改変付加を行った所がある。

まず尾上の出自に関して新たな話を作っている。彼女の母はある武

士の隠し妻として彼女を産んだが、夫が没して身寄りを失い、鎌倉の大崎文兵衛なる武士に再嫁し、彼女もそこで育てられた。母が病没した後、彼女は瓶井侯の姫に出仕し、輿入れの折に付き従って当家に入り、今の奥勤めに至る。和漢の書籍に通じ、詩歌吹弾に堪能、しかも「貞操正ふして職を麁略にせず」奥向きを治めたので、浜名侯の信頼厚く、中老職に抜擢されたとする。

老女岩藤は、「其性質疎暴にして嫉妒偏執の心深く且奸智逞きもの」であったとするが、単純に悪人ゆえ尾上に悪事をしたとは書かない。彼女は家中の士永井亘の姉で、要するに最初から当家に仕える者であったが、奥方輿入れの時入って来た尾上が遙かに自分を超えて寵遇されたことから激しく恨み憤った。かくて奸計をめぐらし、まず奥方に対し、尾上は殿の寵愛を得ようと企んでいると讒言するが、奥方は「固尾上が為人を深く知り給へば、正しく岩藤が寵を妬の讒言なりと察し給へば」、全く取り合わなかった。「斯て岩藤は夫人の讒を信じ給はざるを益〻忌嫉事日に増し、此上は面前尾上に恥辱をあたへ自ら罷去しむるの外なしと、日夜此事をのみ心とし其隙を伺ひ居たる」ようになる。

以上の所に、人物の感情が必然のものであることを記しながらその言動を描いて行くという、作者春暁斎特有の記述の形が表れている。[8] ここでは、ある性質（疎暴、嫉妒、偏執、奸智）の者が挫折をする、それを解消しようとするが、さらに挫折を重ね、その中で一つの感情の中に追い詰められて行くと書くのである。続いてある夜、殿が奥向きに出座あって、一同古今の事跡について談話しようということになった。殿から、常盤が夫源義朝討ち死にの後平清盛に再嫁したことをどう思うかと問われ、先ず岩藤が、常盤は清盛に嫁して子の義経らを守ったことにより、後に平氏を滅ぼすことを得たのであり、彼女の行為は不貞に当たらずと述べる。次に尾上が意見を求められるが、「私ごときの賤もの、いかで加る事をわきまへ候べき。只今岩藤が告すを承りて始て其理を聞、実もと存候なり」と差し控える。ところが岩藤は、「尾上が辞譲の言とは心も付ず、実にか〻る事跡には疎きものよと見慢、此時にこそ思ふ程渠に恥辱をあたふ時至れり」と思い、博識のそなたがその申しようは、私が申したところ取るに足らずとの嘲りかと詰る。尾上はやむなく自説を述べるが、それは、常盤が亡夫義朝の仇を報ずるために清盛に嫁したとするならば、清盛の寵が衰えて後さらに大蔵卿藤原長成に嫁したことが説明できず、従って不貞とせざるを得ないとするものであった。岩藤はここぞと、「密に聞、其方の母といふは、常盤の前のごとく止難き艱あるにもあらず、唯一身の依附べき方なきが為に復び嫁たりと。さらば是社取も直さず禽獣の行状といふべし」と決め付けて呵々と笑う。尾上は主君をはじめ満座の前で亡母のことを辱められたことを憤りつつ、自分の不用意な発言に出た事でもあるために深く傷付く。

部屋に帰った尾上は倒れ込んでしまう。下女お初はその原因を他から聞き知り、「是尋常事にあらず。恥辱を忍び給はざる御気質。もしやの事もあらんか」と憂慮し、尾上の側を離れず他事によそえては短慮を戒めた結果、尾上は終に鬱陶を散じて勤めに戻る。殿と奥方は、尾上の争いを好まぬ温敦の性格を賞し寵遇は倍旧となる。岩藤は「案に違ひて大に焦慮、「己れ尾上ふた〻び人に面をむけざるごとき恥をあたへ退ん」と種々工夫を凝」すこととなる。岩藤からみれば、重ねての挫折であった。この時に草履事件は起こった。

一時事ありて侍女の輩を皆々召れしかば、各心急て御前に出るに、尾上は思ひ忘れし事ありて半途より曲房に帰らんと心急の余り、

何の思慮もなく廊下に在合ふ草履を履て立帰る。奚計らん、是岩藤が草履なりしかば、兼て意趣を含る岩藤、斯と見るより時こそ得たりと……

草履の間違い自体は偶然のことであった。ただこの時岩藤は焦慮の中で尾上の失態が起こるのを待ち構えていた。岩藤の感情に沿って見るとき、草履打ちは起こるべくして起こったものということになる。岩藤は、奥向きの不法を正すのは我が役目、以後の懲らしめのためだと言い、草履で尾上の面上を続け打ちにする。「流石の尾上も今は堪得ず、已に手を返さんとする処」、駆け付けた侍女たちが引き分ける。尾上は心を静め改めて詫び、「何思ひけん、彼草履を懐に納め」て部屋に帰った。そして遺書を認め、「彼草履を寸々に切裂、返す刀に咽喉を貫て」絶命した。親里への使いに出されていたお初は胸騒ぎがして立ち帰り、尾上の死骸、そしてその傍らに切り裂かれた草履があるのを見付け、「岩藤があらぬ恥辱をあたへしを慍りて斯成果給ふ処なるべし」と尾上の心中を受けとめ、敵討を決意する。本作における岩藤の仕打ちは、追い詰められた感情に由来する分執念深く容赦がない。ここに至って尾上の心中に憤怒が生じたのは当然のことであり、お初はその憤怒を共有して敵討に臨んだとするのである。

春暁斎は浜田藩女敵討に関して、やみ難い人間の感情という観点から捉え直したいと考え、そのために加賀騒動から切り離し実録に立ち戻ったものと思われる。春暁斎が依拠した実録がいかなるものであったかを知るすべはない。流布した実録（即ち第二節に掲げた如きもの）からこの『絵本雪鏡談』巻十二が作られたとすれば、多く手を加えたことになる。もし仮に本作とほぼ同様の筋を持つ実録が存在してそれに拠ったとするなら、その実録は全体から見れば特異なものと言うべきで、やはりそこには春暁斎の選択が働いたということになる。いずれにしても、感情に沿って展開する叙述の部分は読本としての創作であったと推定してよいと考える。

八　結語

浜田藩江戸屋敷女敵討の話は、実録を通じて近世中後期の人々の広く知るところとなった。その中で実録の継承者たちは、さらなる読み込みを試みていた。浄瑠璃『加々見山旧錦絵』によって一層有名となった後も、読本の作者たちは、自身の考える読本の様式に照らしながら新たな捉え直しを行っていた。この話は、素朴な筋の中に創作者の想像力をかき立てる要素を多分に含んでいたと言うべきであろう。

注

（1）『郷土石見』第七十八号（二〇〇八年）、同八十号（二〇〇九年）

（2）中村幸彦「御家狂言におけるかぶき性—加賀騒動の芝居と実録体小説—」（『中村幸彦著述集』第三巻）

（3）『読本の研究』第一章第三節「絵本ものの諸相」（一九七四年）

（4）『読本研究新集』第一集（一九九八年）

（5）『加々見山旧錦絵』の引用は、叢書江戸文庫『江戸作者浄瑠璃集』（宮井浩司校訂）による。

（6）ただし尾上について「幼名みち」と割り書きで注記するのは実録由来。

（7）実録では、草履を蹴付ける。

（8）春暁斎特有の記述体については、『絵本亀山話』（享和三年（一八〇三）刊）等に即して考察したことがある（拙稿「読本における上方風とは何か」、『鯉城往来』第一〇号、二〇〇七年）。

〔付記〕底本の引用にあたり、明らかな誤記等は正し、また振り仮名は適宜省略した。その一方で読解の便のため新たに振り仮名を付した部分もある（その場合、（　）で括って示した）。

ご所蔵資料の調査につきご高配を賜った馬庭將光氏に深謝申し上げる。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」（二〇一〇～二〇一二年度、代表・要木純一）、科学研究費補助金・基盤研究（C）「後期上方読本の成立における実録の影響についての研究」（二〇〇八～二〇一一年度、代表・田中則雄）の研究成果の一部である。

Jitsuroku and *yomihon* of *Onna-katakiuchi* at Hamada-han's Edo residence

TANAKA Norio
(Shimane University, Faculty of Law and Literature)

〔Abstract〕

Onna-katakiuchi (the revenge by a woman) at the Hamada-han's Edo residence, which is said to have occurred in the Kyoho-period, was fictionalized in *jitsuroku* and *yomihon*. Then it was adapted according to their respective forms.

Keywords： *jitsuroku*, a historical novel, *yomihon*, novels in Edo period